

弁天様略記

(表紙)

「 弁天様略記

付弁財天の由来と弁天町変遷図

」

もくじ

まえがき

弁財天碑の図

弁財天について

七福神の弁財天

大弁財天の十五童子

日本の三弁財天社

市杵島姫命と弁財天

弁天様のはじまり

その背景と地形について

川の中の島と切戸

外河原という地名

川島邑の誕生と利根川の変流

川島邑の誕生

利根の変流と古利根川の誕生

自然堤防時代想像図

古利根河畔の弁財天

各地の弁財天

弁財天社の移り変わり

弁天島か弁天半島か

明治二十五年の古地図

明治以前の弁財天安置想像図

弁財天川砂の中へ沈む

土手の上の弁財天

停車場の初期時代

弁財天夢枕に立つ

古利根川改修時の弁財天

弁財天の神々

移遷後の弁財天

弁財天に始めて祠を作る

その後も続く関根家の守り

昭和年代の弁財天

弁財天関係年表

明治末年頃の町内図

大正末年頃の町内図

弁財天は白竜の神か

お飾りは尾花分家

杉戸音頭

百間和賛

あとがき

ワープロによる再版について

まえがき

昭和四十七年度、はからずも当弁天町の地区長を引き受けることになり、以来六月、町内各位の指導と協力のもと、役場末端行政の手伝いを致して参りました。

この間、天王様の祭りを通じ、停車場共栄睦会内集会場である「弁天会館」の使用を致して参りましたが、その時に、弁天様、すなわち「弁財天社」の由来に関心を抱き、

天財石碑

寛政元巳酉三月吉日

天財石

百間邑川嶋

講中二十人

高さ	37.3 cm
横幅	21.5 cm
奥行	15.3 cm
内則	7.0 cm

その調査を思い立ちました。弁天町で生まれ、弁天町で育ち、弁天町の一役員に選出されて、町内に祀られている「弁財天社」についての知識が皆無とは、吾ながら肩身の狭い思いにかられた次第です。

ここにその略記として、弁財天由来、並びに弁財天と共に発展した弁天町内の変遷を、一応発表することができずとも、ひとえに弁財天社の導きの賜ものと考えておきます。

しかし、いかんせん浅学非才、若輩のため、且つ遠く過ぎ去った昔のことの上、資料散失多く、その要を得ない面が多々あるため、専門的、学問的立場より見た時には、多くの誤りが内在する事とは思いますが、「一応の略記」として発表したに過ぎない点を認めて、各位の了解を願うものです。

出来ずならば、いつの日か稿を改め、よりよい「弁財天記」の紹介を念しながら、まえがきに代える次第です。

昭和四十七年九月

遠き武蔵野の東流を想い浮かべながら

島村 繁 夫

弁財天石碑函

寛政元巴酉 三月吉日

弁財天

百間邑川嶋

講中二十人

高木 37.3 ㊦

横幅 21.5 ㊦

奥行 15.3 ㊦

内則 7.0 ㊦

弁財天について

一口に、弁天様則ち弁財天とは女の神様だということは、広く知れ渡っています。それ以上のことを、いろいろと辞典などを通じて調べてみますと、仏教渡来の歴史と同じく、その源はお釈迦様生誕の地インドに発して、インド古代神話の中にある「湖に富むもの」という、河川を神格化した女神と伝えられております。

名前はいろいろに言われて、妙音天、美音天、大弁財天女など、略して弁天、俗に弁財天と言われております。

インドにおいては、インダス川（インド三天河川の一つ、総延長三二一九〇km）を神格化したものといわれ、この神は、人の汚れを払い、富、名譽、福樂、食物を与え、勇氣と子孫とを恵むといわれます。

チベットでも尊宗せられ、中部のヤムド湖には、弁財天の浄土があると信じられております。

七福神の弁財天

日本において、室町時代の中頃（今から約五〇〇年前頃）に、僧秋月が描いた「七福神乗合船」に弁財天として描かれ、その後、俗信によっていろいろに組み合わされた七福神が出現しましたが、一般的には、次の七名が伝えられています。

恵比寿・大黒・布袋和尚・寿老人・吉祥天・毘沙門天・弁財天

この中にある弁財天が、日本における絵になった記録としては、最初だろうと考えられております。

大弁財天の十五童子

印輪童子・官帯童子・筆硯童子・金財童子・稻粃童子・斗升童子・飯櫃童子
衣装童子・蚕養童子・酒泉童子・愛敬童子・生命童子・從者童子・牛馬童子
船車童子

この十五童子各神呪を説き、宇賀神王に給仕し、一日より十五日に至りて、日日相
当たり、衆生に福音を与えることを司るなりと教えられております。
なお、善財童子を加えて十六童子ともいいます。

日本の三弁財天社

日本における三弁財天として、次の三神社があげられています。

近江国竹生島弁天堂（滋賀県東浅井郡びわ村）
相模国江ノ島神社（神奈川県藤沢市）
安芸国厳島神社（広島県佐伯郡宮島町）

そして、弁財天の多くが水辺に祀られているのは、もともとが河川神であったこと
を物語っているということが分かるといえます。

なお、陸前国（宮城県）金華山神社と、大和国（奈良県）天ノ川神社を含めて、日
本の五弁財天という説もあります。

○竹生島には、竹生島観音様で名高い西国三十番札所の宝厳寺、竹生島明神の都久
夫須磨神社と共に弁財天を祀つてある弁天堂とがあります。

○江ノ島神社は、もと龍神を祀りましたが、養和元年（一一八一年、七九一年前）
に、僧文覚という人が来て、修業し、弁財天を勧請し、神仏習合を説いて、金亀
山興願寺と号しました。

明治維新の神仏分離で、現在の江ノ島神社となっています。

○厳島神社には、イチキシマヒメノミコト・タゴリヒメノミコト・タギツヒメノミ
コトの三神が祀つてあると伝えられています。

市杵島姫命と弁財天

この市杵島姫命が弁財天だと言われて、三弁財天の一つに、厳島神社が数えられて

いるわけですが、一説には、最初に記しましたように、弁財天はインドの河川神で、
我が国の市杵島姫命と混同されているとの説もあります。

もし、混同説が正しいとすると、厳島神社と弁財天社を、通称弁財天として祀つて
いる事実を多く見受けるところを考えると、どちらが正しい説か、判断に迷いを生じ
ます。

しかし明治元年の神仏判然令までは、神仏習合（両部神道ともいい、神を仏教の菩
薩と関連づけて説明し神と仏を同一の境内に祀る事）として両方に使われていたとも
言われておりますので、神としては市杵島姫命、仏としては弁財天として祀られ、そ
れぞれ使い分けて崇拝されていたとも考えられます。

弁天様のはじまり

その背景と地形について

○わたくし達の町内、弁天町に祀られている弁天社の始まりは、ご神体である石碑
の右側に刻みこまれてある「寛政元年巳酉三月吉日」とありますように、今から
丁度一八三年前（一七八九年）に、川嶋講中二十人の人達によって作られ、水辺
に祀られたのが始まりということが分かります。

○この二十人の家が、現在どこどここの家かということは、川嶋関係者のくわしい
調査が待たれておりますが、切戸三、四戸、川島十五、六戸の人達か、或いは川
島のみ二十戸の人達か、いかなせん一八三年前のことで、どこにも記録が無い
め、定かではありません。

川の中の島と切戸

○徳川幕府が、利根川の流れを東へつけかえ、東京湾へ注いでいた流路を、鹿島灘
へ移し変えたのが、文祿三年（一五九四年）より、承応三年（一六五四年）までの、
前後六〇年間（約三七八年～三二八年前）と記録にあり、それまでは名前が示す
ように、この古利根川筋を、利根の本流が下総国（千葉県）と武蔵国埼玉県・東
京都の国境いとして、滔々と流れ続けていたわけでありました。

○そして、絶えず上流の土砂を運びつつ、あちこちに比較的高い土地を作りながら

水路は絶えず蛇行し、変流し、雨期には満々と水を湛えて流れていたわけでありこの土砂によって作られた地帯が「自然堤防地帯」と呼ばれる土地であります。

○この利根川の中に出て来た自然堤防の比較的高い所、即ち増水期でも川面に姿を表わしている土地、それが島ということで「川島」という地名が生まれ、川島の集落と地続きではあっても、家が離れている、切れている集落ということで「切戸」という地名が生まれたと言われております。

外河原という地名

○川島と切戸の間に横たわって出来た当弁天町は、原野ということ、その名も「外河原」と呼称されており、一面にスキの原が広がり、白狐などが住んでいたと伝えられております。

川嶋邑の誕生と利根川の変流

川嶋邑の誕生

川嶋邑（むら）の人達の生活の始まりは、いつの頃からだったか、現在地元の人達に伝えられている話、ならびに、記録に残っている点から考察しますと、約三五〇年前後頃よりということが考えられます。

同地区各家墓所の墓石には、次のような年号が刻まれ、残っています。

池上家	天和二年	二九〇年前
大高家	享保七年	二五〇年前
尾花家	元禄十年	二七五年前
鷲谷家	寛永十一年	三三八年前
島村家	承応三年	三一八年前
深井家	貞享五年	二八四年前

なお、池上家過去帳には、高野永福寺調べによると、慶長九年（三六八年前）という記録があり、同家墓所に、表面が剥がれてしまっている、一番古いと見られる墓石

があり、この記録の裏付けとなつて残っています。

以上が、記録に残っている最も古い生活の歴史ですが、この当時は、まだ利根川の本流が流れていた時であり、海拔八・八mという土地の高さから判断して、人間の生活に堪えられるだけの島を形づくっていたとみられます。

また、同地区共同墓地である一庵坊由来記にも、延宝四年（一六七六年、二九六年前）に庚申を祀るとあり、庵祖一庵法師享保二年寂すとあり、これは今から二五五年前に当ります。

以上を総合して判断しますと、川嶋邑（含切戸）の人々の生活は、約三五〇年前後より始まったということが言えると思えます。

利根の変流と古利根川の誕生

下総国と武蔵国との境を流れていた利根の奔流は、その後鹿島灘の方へ流れを変えられ（承応三年、今から三一八年前）その期間内に江戸川が掘られ、さしもの大利根の流れも細くなり、その本流は一筋の川幅に縮められ、名も古利根川となつて、近辺の田野大いに拓けたと記録にあります。

しかし、一度大雨が降ると、中流以下は自然の理に反した水路変更のため、たえず大害を起し、流れを細めた古利根川といえども、堤防を越えた水が各所を暴れ廻り、せつかく開いた多くの田野に、被害を与えたであろうことは想像できるでしょう。時は下つて、明治・大正時代の古利根川の姿について、次のような記録があります。

「水利複雑ヲ極メ、不備欠陥頗ル多ク、……修治ヲ怠ラザリシト雖モ、被水歳ト興ニ増大シ、沿岸農村ノ困窮其ノ極ニ達セリ……」

以上は、和戸橋際に建てられている古利根川改修記念碑中の一文ですが、これによつても、大正時代以前明治を逆上つて、利根川が古利根川になった以後（江戸中期〜明治・大正時代）の姿が想像できるでしょう。

古利根河畔の弁財天

今から三一八年前に、利根川の水路変更工事は一応終わり、その時より古利根川と

いう名に変わったといえますが、弁財天を祀った一八三年前までの間、約一三五年間
は、それでも一五・六年に一度程度といわれていた、利根川の大洪水に見廻わられて
たわけでありその時、既に川島地区に土着し、生活していた人達の水に対する恐れは、
現在の人達の想像以上のものがあったと思われる。

一五・六年に一度程度の大洪水と、毎年のように来る大雨期の古利根川の溢水など
の被害のため、人皆寄り集まり、より語らい、誰からとなく、水の神様と伝えられて
いる弁財天の設置が決まり、古利根川の畔りに石で作った御神体を祀ったものと考え
られます。

〔地図Ⅰ〕 自然堤防想像図

各地の弁財天

そこに至るまでには、各地農村地帯に祀られてある弁財天の話も参考にしたであろ
うと思われまします事実次のように各地に弁財天が祀られております。

杉戸町清地	弁天堂	建久三年	七八二年前
	仏像	寛政一〇年?	一七四年前
〃 小谷堀	巖島神社	元禄一四年	二七一年前
	仏像		
白岡町爪田谷	大弁財天	宝曆一〇年	二二二年前
	宮造石碑		
宮代町西条原	弁財天	明和七年	二〇二年前
	宮造石碑		
宮代町和戸宿	巖島神社		年代不明
	石碑		
〃 道仏	弁天堂		年代不明
	仏像		
〃 東	所在地跡に弁天屋敷という呼称が残されているのみ。		

弁財天社の移り変わり

参考古地図Ⅲにあります様に、明治二十五年当時の土手は、今より少し川の方にあ
り、現在の土手当たりには、細長い池があり、その周りは田圃になっていたことが分
かります。

川島・切戸間道路が、夏期或いは古利根川増水時における、事実上の土手の役目を
していたらしく、その当時の田圃を流作田と呼んでいます。

道路・田・池・土手・川というような明確な区別は考えられない様な状態、即ち、
冬の増水期は土手が通れ、田圃の中に入れても、夏の増水期には、川島・切戸間道路
まで水が溢れて、池・田を覆い隠していたというように、今では想像出来ないほど、
土手も低く、土地も低い、いわゆる流作田地帯という事だったと言えましよう。

川島・切戸間道路だけが、段丘の端を通過していつときわ高かったと伝えられてい
ます。

弁天島か弁天半島か

地図Ⅲは、明治二十五年作成のものであり、それより一〇三年前の寛政元年当時の
土手は、当然その時より整備されていなかったと言ったことが考えられ、川島・切戸間
道路の手前まで古利根川の水が来ており、池も田圃も川床になっており、かろうじて
弁財天を祀った当りまで、川島方面より土地が突き出ていたか、或いはその所だけが
小さな島になっていたのではないか、というような地形が考えられます。

(地図Ⅱ参照)

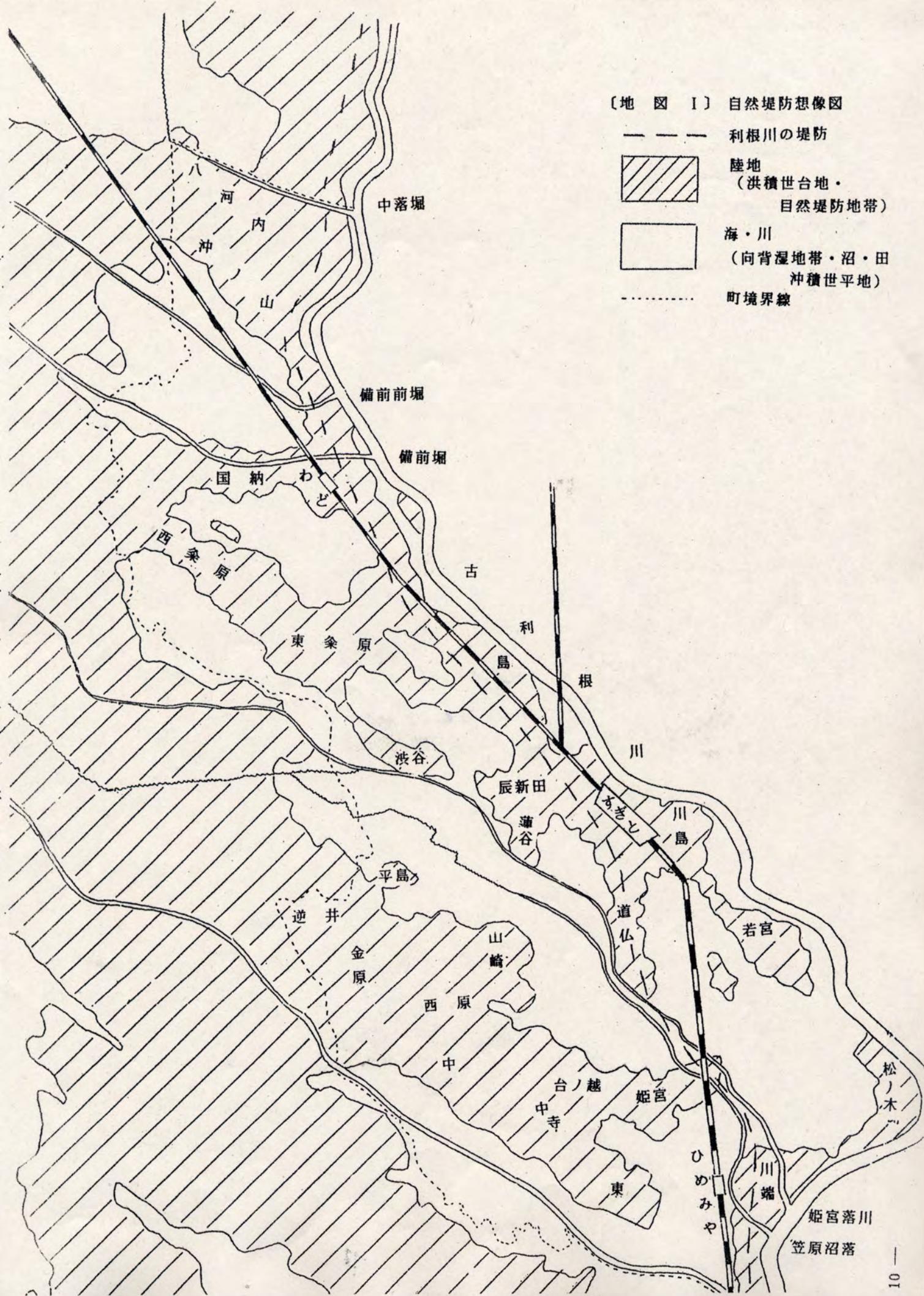
各地の弁財天が、池の中の島に祀られているのを見ても、寛政元年当時の土手は、
川島・切戸間道路で、弁財天の祀つてあった当りは、川岸に突き出ていた小さな島状
半島になっており、そのため各地の池の中に祀る弁天堂を見習って、その島状半島の
小高い所に弁財天を祀つたのではないかと言う事が考えられると思います。

或いは、祀つた場所が、最初のうちは島の中央部ではあったが、その後増水の度に
島の北西端が洗われ徐々に崩れ流されて、結局祀つた場所が島の先端になってしまっ
たという事も考えられます。

その後、島との間に渡してあったであろう木橋が壊れてきたのを機会に地続きにし

〔地 図 Ⅰ〕 自然堤防想像図

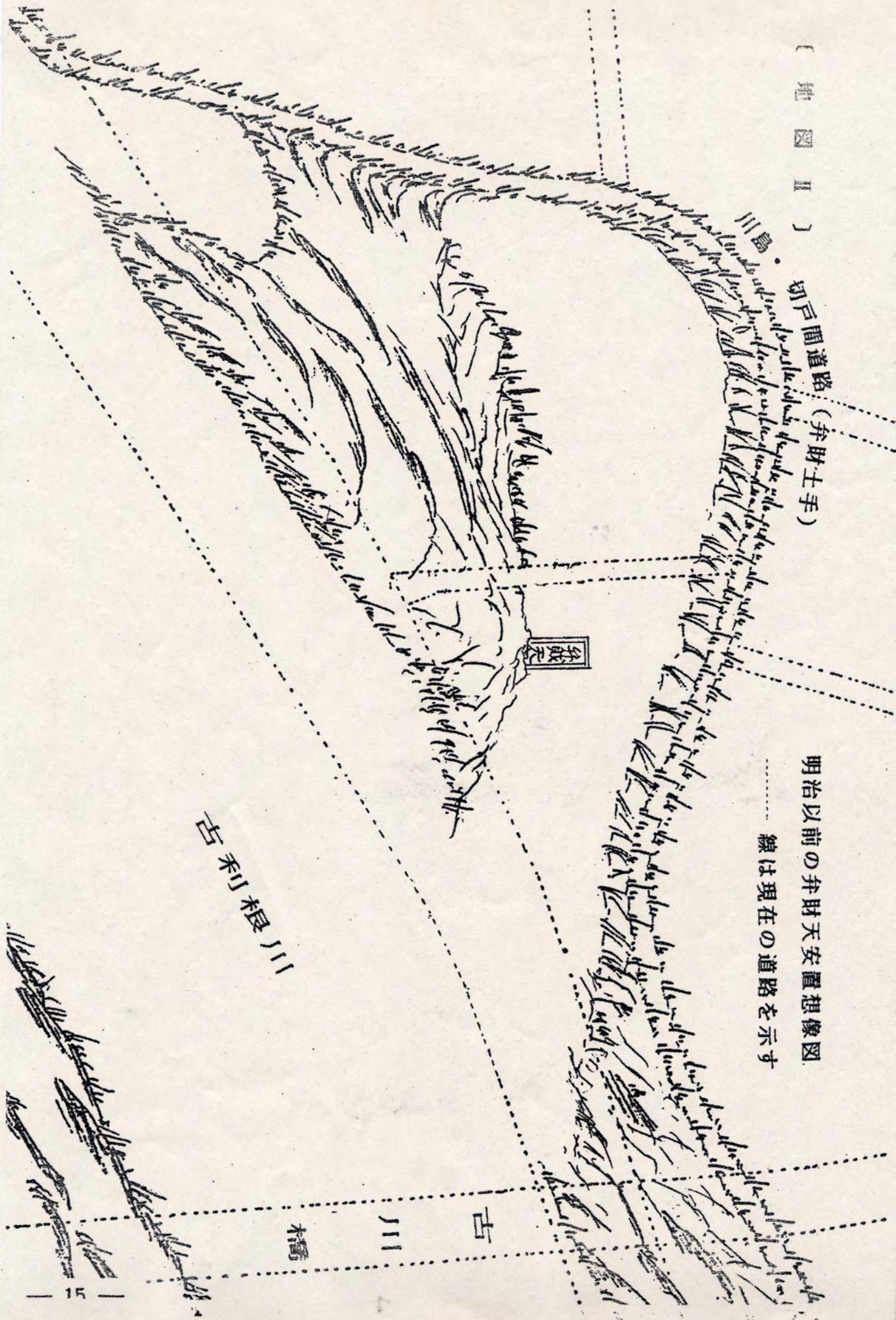
- 利根川の堤防
-  陸地
(洪積世台地・自然堤防地帯)
-  海・川
(向背湿地帯・沼・田・沖積世平地)
- 町境界線



切戸間道路 (弁財土手)

明治以前の弁財天安置想像図

線は現在の道路を示す



て、参拝し易い様にしたため、明治時代の古地図に記載される頃には島状半島の先端に祀つてある様な結果になったと言う事も考えられる事でしよう。

しかしこれはあくまでも一つの想像に過ぎません。

弁財天川砂の中へ沈む

その後、年々歳々月日が流れて、小さな段丘の端の上に祀られた弁財天は、夏草に覆われ、増水した川波に洗われて、小さな島状半島弁財天は、いつとはなしに沈み、その脇にあつた池も浅くなると共に土手の川砂の中に自らの重みによって、その姿を没したという事が考えられて参ります。

明治末から大正時代にかけては、土手の脇の池の端に祀つてあり、現在の年輩の人達の多くは、その姿と場所を覚えておられます。

この年輩者の話を元に考えますと、明治末期以前、寛政元年以後の間、約一二〇年間に、先にも述べました様に、徐々に弁財天は洗われ、弁財天は自らの石の重みにて沈下し、川砂の中に姿を没した時代もあつたと考えられます。

この想像を裏付ける様に、大正時代に、古利根川の川ざらい（砂上げ）工事に、農閑期に出た人達の言い伝えとして、川砂の中に沈んでいたという話が伝わっています。

或る人がよく見たら「弁財天」と彫つてあるので、「神様の石では勿体ない」と言つて拾い上げ、土手を二坪小高く土盛りし、雑木一本を植えて安置したと言う話です。

大正時代（十三年以前）には、殊に土手の外側に、川に背を向けて安置してあつた訳ですから、この話は明治時代の事が伝わつてきて、残つている話なのか、或いは、

大正初め頃の出来事なのか、詳しい年代は不明ですが、事実の事の様です。

砂上げ工事は、川の流れを良くするために、毎年冬の渇水期には行われていたと考えられますが、いつ頃から始まったかは、はっきりしておりません。

この砂上げ工事によつて、まっすぐな一本の土手が徐々に作られ、その外側のくぼ地にも田圃が作られていったという事が考えられます。

土手の上の弁財天

以上の様に、明治末期より大正十三年までにおける弁財天は、土手の外側に、二坪小高く土盛りし、雑木一本を脇に従えたまま、祠もなく、風雪に叩かれながら、

水の神様として、川島村一帯、即ち、切戸・外河原・川島前・川島の各耕地を見守りながら立ち続けていたという事でしよう。

この当時は、田があり、池があり、弁財天があつて田圃の中の小道を通つて、池の端に祀つてある弁財天様へ参詣を繰り返していた時代であり、夏場には、川島方面よりの土手伝い、或いは畑伝いにしか行かれなかつたと言われています。

古川橋の方よりの土手が通れる様になつたのは、大正八年より昭和九年にかけて行われた古利根川改修工事の途中である年、即ち、大正十四年以降ではないかと思われま

ります。

以上が、土手時代の弁財天の姿であり、この当時川島・切戸間道路が弁財土手（べんぜえどて）と呼称されていたと言います。

これを考えても、現在の様な土手はなく、その所がいくらか浅くなって、葦が生い茂っているだけの土手で、夏の増水期の事実上の土手は、川島・切戸間道路だったという事が分かります。

停車場の初期時代

明治三十二年八月二十七日、東武線業平〜久喜間開通に伴い、杉戸駅の業務開始となりましたが、それまで一面のススキの原（段丘）、開墾地（畑）と続いた杉戸駅前周辺に、ボツボツ家が建ち始め、停車場町内を形作つて参りました。

この間、明治四十三年に、大水害がありました。概してのんびりした停車場初期時代の姿がそこにあり駅前通りは、駅開通後植えた桜の木が両側に繁茂し、桜のトンネルと伝えられている程でした。

毎年七月十五・二十日の「天王様」には、駅前に舞台が架かり、面神楽が踊られ、浴衣がけの善男善女が近郷近在より集まつて、停車場という名にふさわしい賑わいを、段々と見せ始めて来たそうです。

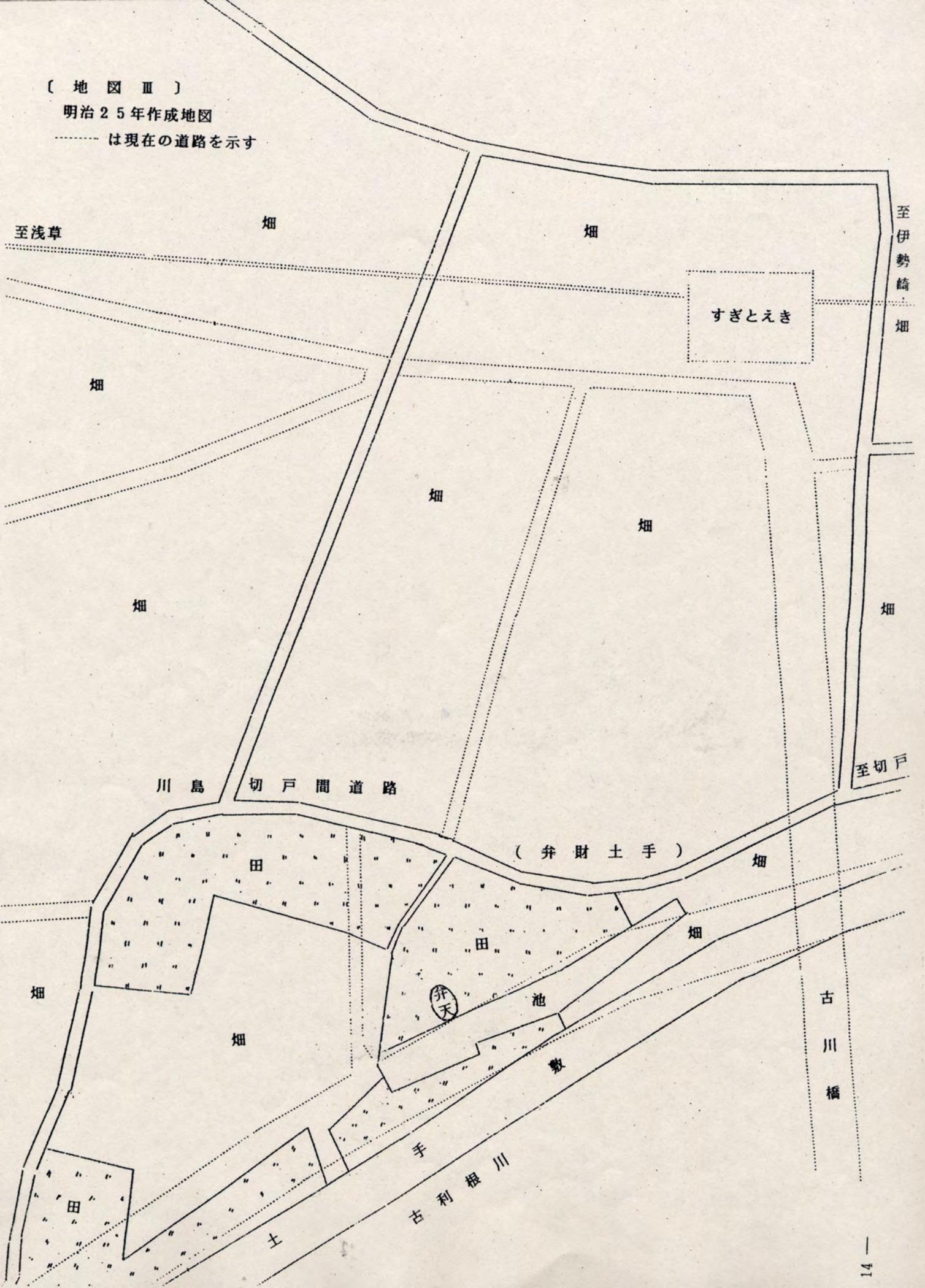
明治三十二年より大正十三年までの停車場の姿、表通りの賑やかさと対比的に、裏通りである弁財土手の一角は、寄せては返す古利根のさざなみと共に、一幅の河川風物詩を奏でていた事でしよう。

（地図Ⅳ参照）

〔 地 図 Ⅲ 〕

明治 25 年作成地図

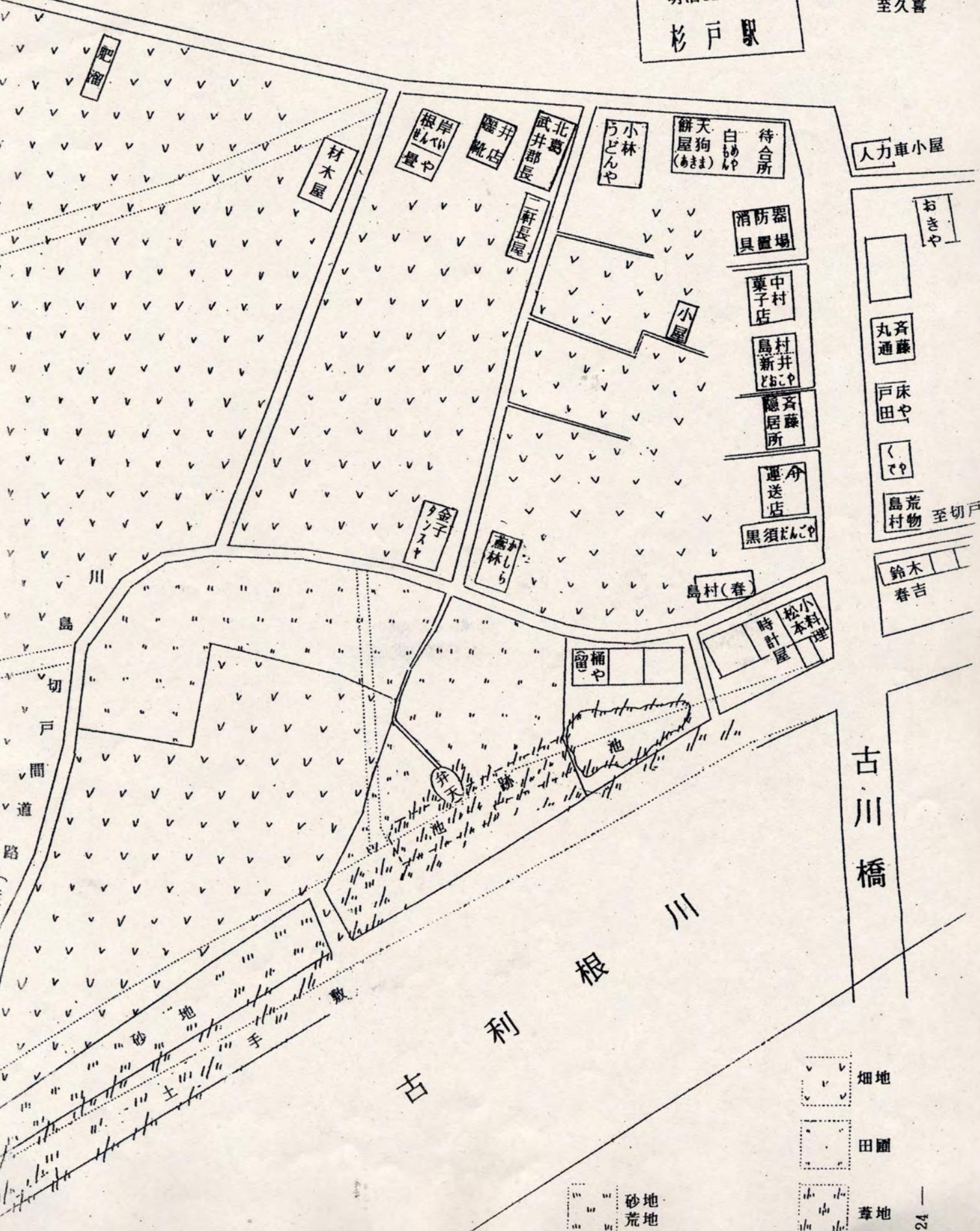
----- は現在の道路を示す



杉戸駅業務開始
 明治32.8.27
 杉戸駅

至久喜

春日部



人力車小屋

おきや

丸齊藤

戸床や

くてや

島荒村物 至切戸

鈴木 春吉

古川橋

畑地

田圃

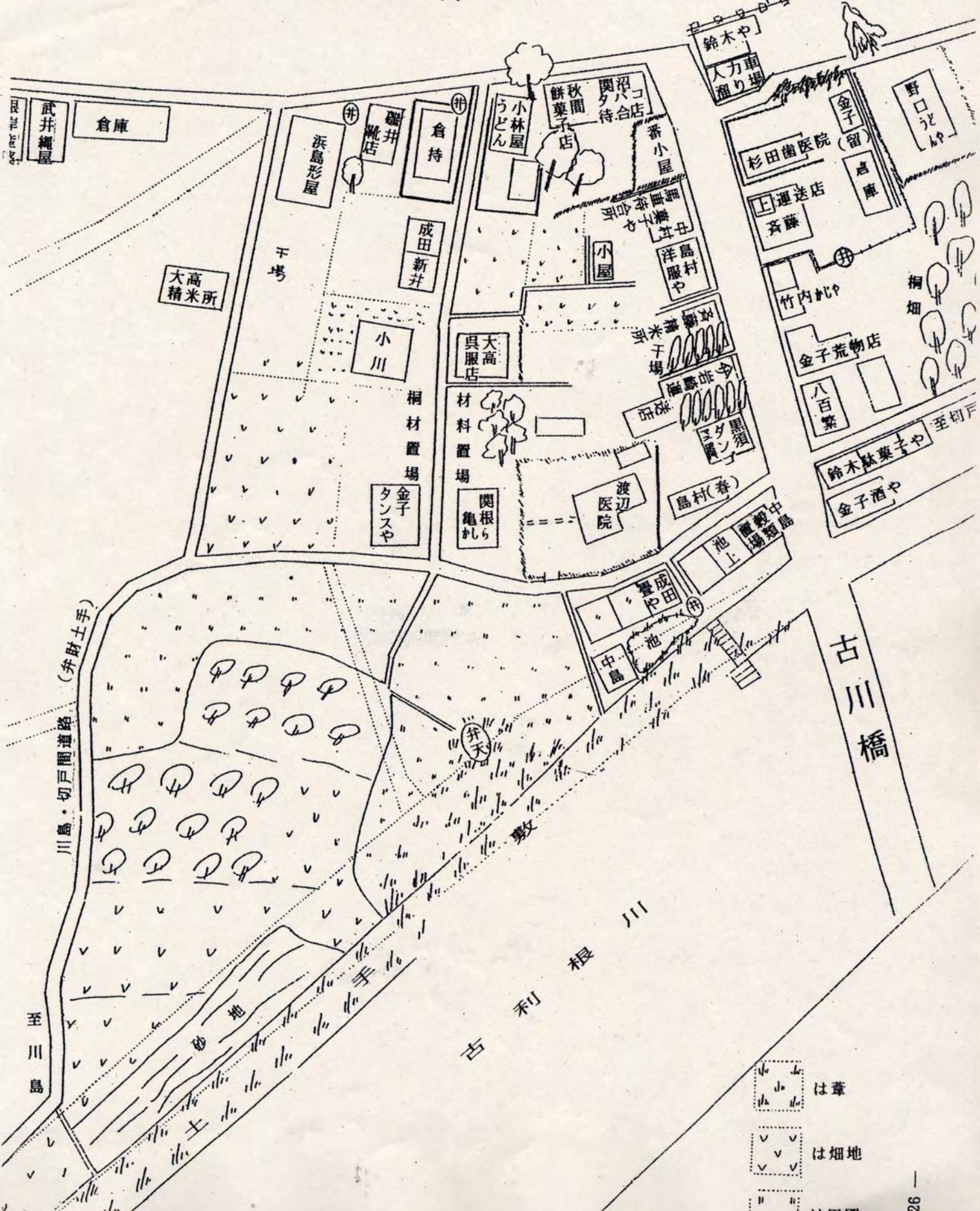
草地

砂地
荒地

[地図 V] 大正末期頃 (大正12年震災前)

杉戸駅舎

----- 線は現在の道路を示す



弁財天夢枕に立つ

土手の手前二、三坪を小高くして、弁財天を拾い上げ安置したのが、大正始め頃と考えられますが、同じく大正初期の頃、川島の島村家の人によって、一時弁財天の移動が図られた事があります。

現住所百間四・三・三八島村志づい氏宅の先祖に、松之輔(明治一一・八・二一生)昭和七・一二・三〇没)さんという人が居り、この人の若い頃の話として、次の様な事が同家、並びに川島耕地内の年輩者の間に伝わっています。

松之輔さんが考えるに、弁天様が土手の草むらの中、それも葦の生い茂った先の方にあつては、お参りする人も少ないし、人通りのある道端の方が良いだろうと、川島・切戸間道路の桑畑になっていた所(現小駐車場)へ運んだ所、その晩から、一時は命が危ない程の原因不明の高熱が出て、床へ起き上がつては、うわ言の様に

「真つ黒い大きなお婆さんが目の前に座つていて、

『元の所へ返してくれ、元の所へ返してくれ』

と言つている。怖くて仕方がない。」

と、ガタガタ震えて親に話した。

親は良七(安政五・一〇・五生)昭和二三・三・二七没)さんといいましたが、

『それは弁天様ではないか。それではすぐ元の所へ持つていかなければ……。』

と、夜半に舟で古利根川をさかのぼり、元の所へ持つていこうとした所、その場所近くまで行つたら、舟は自然と岸に引き寄せられる様に着いてしまった……と

これひとえに、靈験あらたかな弁天様の力だとして同家に言い伝えられている。

その弁天様は、松之輔さんだけに見えて、他の人には見えなかったと……。

そして、さしもの熱も下がり、一命を取り留め、元気になったと……。

これは、弁天様を動かしたために起きた事ではないかと……。

先に記しました「弁財天川砂の中に沈む」という年代が、もし大正始め頃だと仮定した時には、

「神様の石があつた」

「弁財天を祀つた」

と、その拾い出し、安置した当時は、近在の噂として広まった事でしようから、参拝する人、見に来る人が或る程度居たと考えられ、その祀つてある場所が不便であつたため、前記の松之輔さんが、拝みやすい所、即ち、川島・切戸間道路の端へ持つていった、川島講中と刻んであり「川島の神様だから良いだろう」と考えたとしても無理からぬ事だと想像できます。

この弁天様移動の年代は、川島耕地の人達の話を聞き、その時の年齢を基に考えますと、大体大正三年頃という判断ができます。

以後、弁財天は動かしてはいけぬ神様として広まり、大正十三年の川幅拡張まで、島状半島の先端池の端に立ち続けて居たと考えられます。

勿論、大正時代に入った頃には、脇の池は川砂で埋まり、田になつてしまい、上方に小さく名残りを止めていただけでしょうが……。

靈験あらたかな神様として、その後も病になつた家族の人達によるお百度参りも行われていたと伝わっています。

以上考えると、川砂の中より拾い上げた年代は、大正始めの頃か、明治末年の頃という事が考えられると言えましょうし、明治四十三年大洪水の時に、弁財天は一挙に川砂の中に沈んでしまったのではないか、という事も考えられます。

なお、沈んだといつても、全部見えなくなつていたというのではなく、半分位は砂上に出ていた……、勿論、横倒し、下向きであつたかも知れませんが……、という事を伝える人も居ります。

これ以後、即ち、拾い上げて安置し、移動し、又元の場所へ安置した以後、即ち大正三年頃以後は、靈験あらたかな神様という事で、その十五年前に開通した東武線と共に、移住して来た停車場地区の人達を含めて、近在の人達の信心厚い参拝が行われたと言われており、それが現在まで続いているといえましょう。

古利根川改修時の弁財天

大正八年より昭和九年まで前後十六年間に渡り、古利根川の一大改修工事が、県営により行われましたが弁財天周辺は、丁度大正十三年と伝えられております。

いざ改修工事という事で、川幅を広げるための工事を始めましたが、弁財天が祀ら

れているため、毎朝酒一本を供えてから、仕事にかかったと言われております。

外の所が全部終わり、弁財天の祀られてある小高い丘だけが残り、いよいよ其処へ手をつけようとスコップを突きさしますと、その人が急に寒気がして気持ち悪くなり、仕事が出来なくなってしまうそうです。次々と代わって、誰がやっても、熱が出たり、寒気がしたりで仕事が進まず、一時工事ストップという事になってしまったそうです。

現場監督の内田芳之丞さん（山崎）が困り果てた末弁財天をお守りしていた川島の尾花清太郎さん（当主勝治さん親）に相談した結果、切戸の先達・鷺谷蔵次郎さん（当主平作さん祖父）に祝詞（のりと）を上げて貰って移遷し、無事工事が進んだと伝えられています。

弁財天の神々

この時、先達さんの言葉として、弁財天様は、一人の神様でなく、十八人の神様が祀つてあるので、それぞれ異なる拜みが必要であるため、相当長く祝詞を上げたと伝わっています。

十八人の神々の名は伝わっておりませんが、前記の大弁天十六童子を含めても十八人にはなりません。杉戸町小谷堀にある弁天堂内には、御神体の他に十八人の像があり、計十九体が二段に並んで安置してありましたが、この数となにか関連があるのか、今の所不明です。

移遷後の弁財天

大正十三年二月、川幅拡張に伴い、移遷された弁財天は、脇に櫛（けやき）の苗木一本を伴い、今度は近在農村と共に、停車場町内を見守りながら土手の外側中腹に安置されていたと言われております。

この改修工事後、それまで田圃であった所が間もなく埋め立てられ、宅地化されていった訳ですが、これによって、現在の弁天町地区が出来あがったと言えるでしょう。

弁財天に始めて祠を造る

大正十四年春先、長く厳しい冬の眠りからさめたとはいえ、古利根川土手一帯には、

まだ冬の名残りの冷たい風が吹き抜けていました。

弁天様も「たぶんにもれず、小高い土手の上にその小さな姿を、通り抜ける春先の冷たい風にさらしながら、温かい陽春を待ちわびているかの様でした。

この時、停車場で若い時からこの様な状態を長い間見続けていた、町内の頭（かしら）関根亀次郎（当時四五才）さんは、同じく近所の成田条太郎（当時四二才）さん、鈴木春吉（当時？才）さんと相談し、弁天様に祠を造り、その中に鎮座して貰おうと考えました。

三人は相談一決、率先「一金五十銭也」を拠出、早速町内一回り、弁財天祠建設資金を集めました。

建築は山崎の建具や（氏名不詳）さんに依頼、間口三尺・奥行四尺という小さなものでしたが、造作が細かいため、当時の金で十円弱かけて出来上がったそうです。

しかし小さいとはいえ、長い間風雪に叩かれ続けていた「弁財天」にとっては、始めての家であり、始めての安住の場所であったという事が言えるでしょう。

この三人の先駆的行動は、その後の町内の氏神様へと、その存在感を高めるに、大いに役立ったと言われております。

場所は、今まで弁財天が安置してあった所古川橋の方を向けて設置したとのこと。終戦後も暫くの間はその祠とみられるものが、弁天社と共にありましたが、昭和四十五年、弁天社焼失と共に、弁天様最初の家は消えてしまいました。

その後も続く関根家の守り

この弁財天祠建立を期に、前記の関根亀次郎さんは、弁財天の守りを続けて来たとの事です。

建立後は、正月には入口に注連縄（しめなわ）等必要になってきたため、川島耕地としての、弁天様の世話役的立場に居たと考えられる尾花清太郎さんに、お願いしたのではないかと考えられます。

そのために、その子勝治さんが、現在も引き継いで、お飾りだけは受け持っているのではないかと推測されます。しかし、全て故人になられているため、詳しい理由は不明です。

現在も関根家は亀次郎さんの跡を継いで、嘉市さん、当主松四郎さんへと、弁天様

の守りを代々引き継ぎ、弁財社の管理責任者として、その任に当たって居ります。

関根家初代林蔵さんは、杉戸駅開通当初より、町内の「かしら」として町内役職者と共に当然町内運営の一翼を担っていたでしょうから、町内の一角に祀つてある弁財天については、『祠』を子供達が造るそれ以前から、折にふれては周囲の整地等を行つていたものと、考えられています。

昭和年代の弁財天

大正十三年十二月二十八日、弁財天移遷後、翌大正十四年春『弁財天祠』建立、同年十二月二十八日、賛同者五十七戸より寄付を受け、弁財天祠前で祭祀を行いました。

翌大正十五年十二月二十五日で大正時代は終わり、昭和元年は十二月二十六日より六日間、次いで昭和二年へと続き、ここに弁財天もいよいよ昭和の年代を迎える事になりました。

この年代の事、即ち今より約五十年間の出来事は、比較的新しい事であり資料も多数有ると考えますので一応年代順に記録するに止めて、終わりたいと考えております。

弁財天社関係年表

寛政元年三月 弁財天を祀る
 明治二二三・四・四十三 年洪水 弁財天川砂に沈む
 明治末年〜大正初年頃 弁財天拾い上げ安置す
 大正三年頃 弁財天移遷し、後、元の場所へ安置す
 〃 十二年九月一日 関東大震災
 〃 十三年十二月二十八日 古利根川改修に伴い、弁財天移遷、樺の苗木植える
 〃 十四年春 弁財天祠建立(三三尺×四尺位)、関根亀次郎・成田桑太郎・鈴木春吉三氏の據出金と町内寄附金を充当
 〃 〃 十二月十七日 弁財天祭礼寄付帳作る。二十八日祭礼実施

昭和二年一月二日

〃 四年十一月十五日

五年四月十五日

〃 夏〜春

六年三月頃

〃 十月二十一日

七年十月頃

八年四月

十一年三月

十二年七月七日

十三年三月二十六日

十六年十二月八日

二十年八月十五日

二十二年九月十五日

〃 秋頃

二十六年〜二十七年頃

三十七年〜三十八年頃

三十八年一月

四十五年六月二十九日

四十六年三月十四日

計五十七戸

消防ポンプ車購入

「桜能碑」建立。清地橋〜河原橋間百五十本桜苗植樹 岩崎清一・田中豊吉・関根嘉市・武井茂各氏など、若い衆(青年団)が発起人となつて実施

「桜能碑」除幕式と武道大会

弁財天社建築(四間×二・五間十奥殿一坪十一坪)

火の見櫓建設

昭和軒上棟式

弁財天社境内にて有料映画会、入場料十銭

利益金は陸軍省へ献金。(青年団六支部長

武井茂氏)

川島分校新設

川崎大師念仏講発足。弁財天社の念仏生まれる

蘆溝橋事件起きる

川崎大師念仏講記念写真撮影(弁財天社前にて)

「第二次世界大戦」(大東亜戦争)起きる

終戦

夜半、利根川堤防決壊。翌十六日夕方より浸

水始まる

古川区共栄会組織

弁財社お勝手増築

弁財天前廊下分増築

古川区共栄会を停車場共栄睦会に改組

弁財社焼失

弁財天会館落成。現在に至る

弁財天は白竜の神か

昭和十一年三月頃、大師講という念仏会が発足し、各地寺廻りが行われた事がありますが、その中の弁財天の念仏として、次の様な詩が残っております。

妙なるや 祝（のり）を

となうる 雲間より

利益（やく）を賜う

白竜の神

これを考えた時に、清地の花香山来迎院由来記に残っている次の事が、関連ある様に感じられます。

『妾は人倫にあらず、倉松沼の主神なり。近頃一兇きょうごうあり、来りて神扇沼に住す。

大いに神術あり。すでに轡瀬沼の主神を降し、勢いに乗じて、みだりに妾が領域を侵す。妾、従類を尽くしてこれを防ぐといえども、毎戦利あらず。力つきて滅亡せんとす。

今宵、法師の奉持するところの明王の威徳に頼り、大勝を得たり。こゝ願わくば、法師永くこの地に留まり、明王を安置し奉り、沼中に觀世音を祀り、林内に得大勢至菩薩を勧請して、妾の勢力を助けよ。妾また仏法守護の神となり、もつて寺域を鎮めんといひ終わりて、変じて大白竜の身を現し、おどりて沼に入り去る……』

（清地加藤家蔵書より）

という大白竜の神と、なにか関連があるように考えられます。

川島・切戸地区は、近津神社の氏子という事になっており、杉戸町清地と関係があるため、弁財天を祀るについて、清地の弁財天を分身・勧請したために、「白竜の神」という言い伝えが、念仏の詩の中に残っているのかどうか、興味ある研究課題と言え

るでしょう

お飾りは尾花分家

前記尾花勝治さん（尾花家分家）は、先代清太郎さんよりの申し送りとして、現在も弁天社のお飾りを行っております。

毎年正月末に注連縄（しめなわ）や幣など、新しく取り替えておりますが、何故、尾花家分家である同家のみに、申し送られ伝えられているのかは不明であります。

杉戸音頭

1. みかどな みかど御車

とどめしめぐみ

御代はさかえる ホイトセノセ

御代はさかえる 町は繁盛

ハ サツトキテ ヨイトキテ

町は繁盛

2. 左な 左伊勢崎

日光は右手

東武思案の ホイトセノセ

東武思案の 恋の辻

ハ サツトキテ ヨイトキテ

恋の辻

3. 鮒もな 鮒も釣れます

うなぎもとれる

あだし姿の ホイトセノセ

あだし姿の 鯉も住む

ハ サットキテ ヨイトキテ

鯉も住む

4. 流すな 流す灯籠は

千灯に万灯

胸の思いか ホイトセノセ

胸の思いか 炎えるよな

ハ サットキテ ヨイトキテ

もえるよな

(岩崎孝一氏提供)

百間 和讃

(作者不詳)

百間村由緒和讃

婦命頂禮武蔵野に

その名も高き百間村

名称の由来を尋ねれば

今を去ること千余年

年は大同の頃なるが

西と東に陣屋あり

陣屋と陣屋のその間

ちようど百間ありしゆえ

百間村とぞ名付けたり
旧高三千有余石

字は七つに分けられて
小字の数は七十二

北と東のむらさかえ

古利根川の水清く

夏の涼みの心地よや

南を繞(めぐ)る隼人川

西は金谷の出土ヶ原

神代の昔国々の

船の出入りに賑わえし

港の地とぞ伝えきく

中央を貫く東武線

日光線の分岐点

杉戸駅より乗り降りの

汽車の便利のたよ里より

名所霊地数多ある

中に名刹西光院

由緒も古き大伽藍

畳の数も五百畳

真言宗の支務所なり

境内広く木々茂り

昼尚暗く夏寒し

雲つく杉の木の下に

安置まします彌陀如来

勿体なくも国宝の

印綬を賜る御像なり

御堂は名匠甚五郎が

一夜作りのものとかや

仏聖行基大菩薩

雹乱除けの御祈願所

靈驗今にあらたにて

近郷近在亦遠く

詣ずる人は織る如く

八百比丘尼にゆかりある

尼沼こえて前原の

宝性院のお釈迦堂

後生天切と懸命に

祈る心は石よりも

堅き心の金谷村

南無や大悲の遍照院

日も西原に入相の

鐘の音聞えて青林寺

観音菩薩を伏し拝み

辿る星谷の月あかり

宿や山崎越え行けば

祈る心は赤松の

浅間山へ参詣し

下る大谷の土手八丁

雨も降らぬに笠原の

沼に蓮華の花盛り

稲荷の森を夜目に見て

たどりて行けば道仏の

迷いの夢を医王院

中須を過ぎて老人の

気も若宮の青蓮庵

心は丸き柚の木の

身をぞ清むる浄連寺

心の垢を洗いなば

願望成就まのあたり

家運長久富み栄え

福は内野の正福坊

南無有難や有難や

あとがき

弁天社の由来を尋ねてみようと思ひ立つて四十余日、ここに「一応の略記」を書き上げる事が出来ました。夏の暑い盛りに歩きだして、初秋の心地よい風の吹く今日、やっとその歩みを止める事が出来ました。

これを進めるに当たっては、明治末期頃の町内を想（おも）い出しながら図に書いてくれた磯井さん。同じく大正末期頃の地図を書いてくれた前の斉藤さんを始め、多くの先輩の方々から貴重な時間を割いて、いろいろな想い出話を聞かせて頂き、ありがたく思っております。

また、町内外の各位の方宅へもお邪魔し、いろいろとお聞きしたところ、それにこころよく応じてくれた方々にも感謝申上げる次第です。

特に、当町に一枚しか無いという、明治二十五年作成の古地図を、模写させて下さった斉藤町長さんにも厚くお礼を申し上げます。

以上の様に、多くの方々のご協力によって、この「弁財天略記」は生まれたものがあります。できますならば、一人でも多くの人達の目に止まり、弁財天への新たな理解が生まれると共に、各位の指摘によって、より誤りの少ない「正史」を作り上げて参りたいと考えております。

末筆ながら、関係各位に再度お礼を申し述べて、あとがきに代えさせて頂きます。

昭和四十七年九月吉祥日

「弁財天略記」珍しさのためか、各位より希望され不足を来してしまつたので、本日増刷を行いました。この間、弁財天の位置と、年表の一部を訂正する事が出来ました。

右 年十月吉日

ワープロによる再版について

「五十の手習い」という言葉があります。人生八十年時代の今日この節、昨年六十才誕生日直前の、七月六日よりワープロを習い始めました。この世の中に、こんなに便利な機器が出来たものかと、感嘆しながら、覚えるにしたがい、段々と面白くなりしました。指の練習にと、二十年前に出した「弁天様略記」を打ち始め（入力）てみたところ、前かがみによるワープロのやり過ぎで、その後十月に「腰痛」再発、「弁天様略記」の入力も中途半端なままでした。

今年に入り、夏祭りに際し「八坂宮元本神輿」に、地方史愛好家の一人として、又々興味を抱き、郷土史の一環として、その調査を思いました。

しかし、その前に「弁天様略記」のワープロによる印刷完成を考えた次第です。と同時に、前回作成分の中にある字句表現上の解釈訂正や、大正末頃の一項目『弁財天に始めて祠を造る……二十頁』『その後も続く関根家の守り……二十一頁』の記載も必要だったと思い、一部補充の上、再作成しました。各位のご笑覧に供せるならば、幸いと思う次第です。

平成三年八月吉日

島村 繁夫